

先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2016/10/03

イベント通過で一服感が出るか

| 通貨ペア | 基調 | | ページ数 |
|------------------------|----|---|------|
| ユーロ/円 | ↓ | 三角もち合い下抜けで下落余地 予想レンジ: 109.100~115.500円 | 2-3 |
| ユーロ/ドル | → | 大型イベント消化でこう着感強まる中 予想レンジ: 1.10500~1.13600ドル | 4-5 |
| ポンド/円 | → | 決め手を欠く公算 予想レンジ: 126.000~136.000円 | 6-7 |
| ポンド/ドル | → | 英・米の金融政策展望がカギに 予想レンジ: 1.26000~1.33500ドル | 8-9 |

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



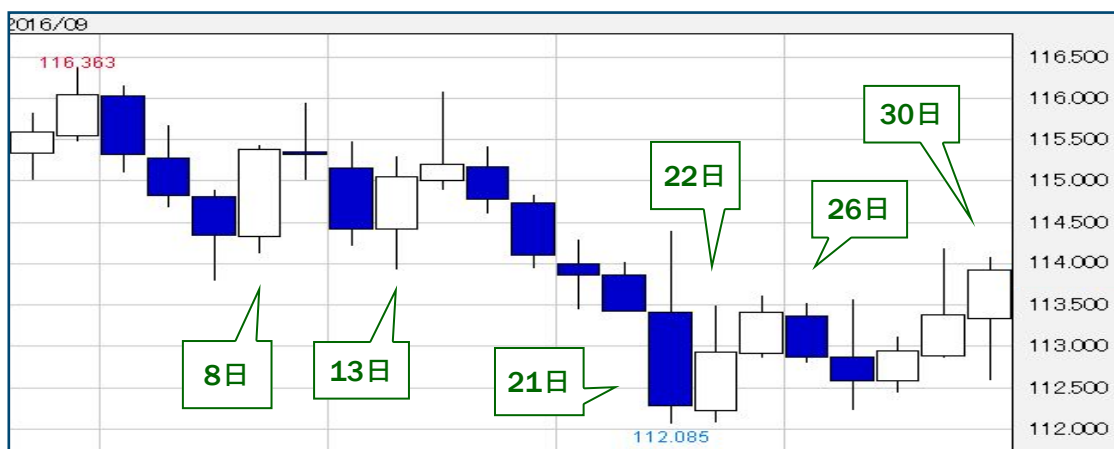
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2016 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

ユーロ/円 9月の推移

9月のユーロ/円相場は112.085～116.363円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.3%の下落(ユーロ安・円高)となった。

2日に116円台に乗せたが同水準では上値が重く、その後は6月安値を起点とするサポートラインと、7月高値を起点とするレジスタンスラインで、三角もち合いを形成。しかし、16日に引値でサポートラインを下抜けると軟調に推移。21日の黒田日銀総裁の会見が緩和縮小とも解される内容であった事などから、112.085円まで一段安となった。ドイツ銀行の経営不安もユーロ相場の重石となり、売り一巡後はやや値を戻すも前述のレンジ下限が上値抵抗となるなど、月を通して上値の重さが漂った。



| 四本値 | |
|-------|---------|
| OPEN | 115.344 |
| HIGH | 116.363 |
| LOW | 112.085 |
| CLOSE | 113.924 |

| | |
|-----|--|
| 8日 | 欧州中銀(ECB)は政策金利の据え置きを決定。その後、ドラギ総裁が「量的緩和を2017年3月までか、必要であればそれ以降も実行する」「資産買い入れプログラム延長について議論せず」「当面の間、追加緩和は必要ない」などと発言した。ECBの追加緩和期待が後退すると、ユーロ/円は115.10円台まで値を上げた。なおECBスタッフ予想は、ユーロ圏GDP伸び率見通しは2016年が1.7%、17年は1.6%、18年は1.6%(6月時点:1.6%、1.7%、1.7%)、インフレ見通しは2016年が0.2%、17年は1.2%、18年は1.6%(同:0.2%、1.3%、1.6%)であった。 |
| 13日 | 独9月ZEW景況期待指数は0.5と市場予想(2.5)を下回ったものの、ユーロの反応は限定的だった。 |
| 21日 | 日銀が「長短金利操作付き量的・質的金融緩和」を発表すると、利下げや社債買い入れ増額などの追加措置がなかった事から、ユーロ/円は112.40円台まで下落した。ただ、事実上の無期限緩和である点が見直された事などから114.392円まで反発。マイナス金利が深掘りされなかったため金融株を中心に株価が上昇した事も追い風となった。しかし、黒田日銀総裁が「国債買い入れは増『減』もあり得る」と発言した事などから再び円買いが強まると、112.085円まで反落した。 |
| 22日 | ECBが20日-21日に行った第2回目のTLTRO(対象を絞った長期資金供給オペ)が公表され、供給額は452.7億ユーロと事前予想のおよそ倍であった事が明らかとなった。 |
| 26日 | 黒田日銀総裁が「マイナス金利の深掘りと長期金利操作目標の引き下げが中心的な手段になる」「仮に買い入れ額が増減しても政策的な意味合いを有するものではない」などと発言すると、円買いが強まり、ユーロ/円は下落。ただ、その後は独9月Ifo景況感指数が109.5と予想(106.3)を上回った事から下げ止まった。なお、ドラギECB総裁は「基本的なシナリオは下サイドのリスク」「ECB当局者は出口戦略を全く議論していない」「必要ならばさらなる手段を展開できる」などと発言したが反応は限られた。 |
| 30日 | ドイツ銀行の経営不安(米国での住宅ローン担保証券(MBS)の不正販売問題について140億ドルの和解金を支払うよう、米司法省に求められている)を嫌気してドイツ銀行株が過去最安値を記録すると、ユーロ/円は112円台に下落。しかし、その後「ドイツ銀行の米司法省との和解金が54億ドルに留まる可能性」との一部報道を受けてドイツ銀行株が急上昇すると、114円ちょうど付近まで上昇した。なお、ユーロ圏9月消費者物価指数は事前予想通り、前年比+0.4%であった。 |

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/JPY

日経平均

| | |
|-------|----------|
| OPEN | 16885.16 |
| HIGH | 17156.36 |
| LOW | 16285.41 |
| CLOSE | 16449.84 |

独 D A X

| | |
|-------|----------|
| OPEN | 10622.33 |
| HIGH | 10780.42 |
| LOW | 10189.94 |
| CLOSE | 10511.02 |

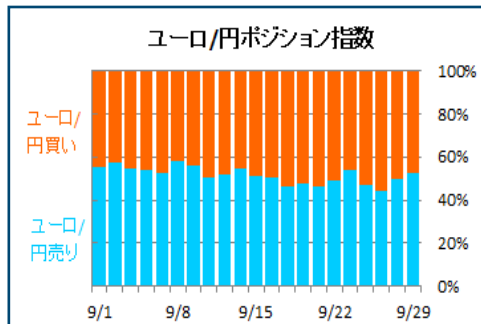
独2年債利回

| | |
|-------|---------|
| OPEN | -0.608% |
| HIGH | -0.608% |
| LOW | -0.709% |
| CLOSE | -0.683% |

独10年債利回

| | |
|-------|---------|
| OPEN | -0.053% |
| HIGH | 0.079% |
| LOW | -0.161% |
| CLOSE | -0.119% |

9月のポジション動向



10月のユーロ圏の注目材料

- ・8月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・10月独消費者物価指数・速報値 (28日)
- ・10月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数 (11日)
- ・10月ユーロ圏消費者物価指数 (速報値(31日))
- ・ECB理事会(20日)
- ・10月独/ユーロ圏PMI製造業・速報 (24日)
- ・7-9月期ユーロ圏GDP・速報値(31日)
- ・10月独Ifo景況感指数(25日)

10月の見通し

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

ユーロ/円相場は、下落トレンドに入った可能性がある。三角もち合い(6月24日安値109.197円と8月16日安値112.351円を結ぶサポートラインと、7月21日高値118.463円と9月2日高値116.363円を結ぶレジスタンスライン)を下抜け、その後もラインを回復できなかった事が理由である。もし、先月21日に付けた直近安値(112.085円)を割るようならば、6月24日安値に向けて再び下押し可能性が出てくる。仮に反発したとしても、前述のサポートライン(10月3日時点では115.249円。1日に約8.5銭のスピードで上昇)が上値を抑えそうだ。

材料面では、欧日共に金融政策の発表予定がない中、先月後半に続きドイツ銀行の和解金の行方がポイントとなりそうだ。もし当事者間で金額が折り合わずに問題が長引くようならば、市場で不透明感が嫌気されてユーロ売り材料視される可能性がある。また、和解金が当初の報道に近い額となれば、ドイツ銀行の経営不安が再燃する恐れも否定できないので注意したい。(川畑)

(予想レンジ: 109.100~115.500円)

ユーロ/ドル 9月の推移

EUR/USD

9月のユーロ/ドル相場は1.11229～1.13269ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.7%の小幅上昇(ユーロ高・ドル安)となった。

一部で米国の利上げが予想されたが実際には金利を据え置いた事から、ドル買いが盛り上がりなかった。また、15日に米WSJ紙が「米財務省がドイツ銀行に対し、過去の米国内での住宅ローン担保証券(MBS)の不正販売問題を巡って140億ドル(約1兆4300億円)の和解金を支払うよう要求」と報じた事をきっかけにドイツ銀行の経営不安が重石となり、ユーロの上値を抑えた。ユーロ/ドルは月を通してこう着した展開が続き、高安はわずか200ポイント程と2014年6月以来となる小動きとなった。



四本値

| | |
|-------|---------|
| OPEN | 1.11563 |
| HIGH | 1.13269 |
| LOW | 1.11229 |
| CLOSE | 1.12381 |

| | |
|-----|---|
| 6日 | 米8月ISM非製造業景況指数が51.4と予想(54.9)を大幅に下回った事でドル売りが強まると、ユーロ/ドルは1.12628ドルまで上昇した。 |
| 8日 | 欧州中銀(ECB)は政策金利の据え置きを決定。その後ドラギ総裁が「量的緩和を2017年3月までか、必要であればそれ以降も実行」「資産買い入れプログラム延長について議論せず」「当面の間、追加緩和は必要ない」と発言した。これを受け、ユーロ/ドルは一時1.13269ドルまで上昇した。なおECBスタッフ予想は、ユーロ圏GDP伸び率見通しは2016年が1.7%、17年は1.6%、18年は1.6%(6月時点:1.6%、1.7%、1.7%)、インフレ見通しは2016年が0.2%、17年は1.2%、18年は1.6%(同:0.2%、1.3%、1.6%)であった。 |
| 16日 | 米8月消費者物価指数が予想を上回る伸びとなり、年内利上げが意識されるとドル買いが強まり、ユーロ/ドルは1.11495ドルまで急落した。ハモンド英財務相が「EU離脱でEU単一市場のアクセス断念する用意」との発言を受けて欧州通貨売りが強まった事も、下落に拍車をかけた。 |
| 21日 | 一部で利上げが期待される中、米連邦公開市場委員会(FOMC)は政策金利の据え置きを決定。これを受けてドル売りが優勢となり、ユーロ/ドルは1.11967ドルまで上昇。その後、イエレン米連邦準備制度理事会(FRB)議長が年内の利上げに言及した事からドル買いが強まると、1.11361ドルまで下落する場面も見られたが、米10年債利回りが1.65%台まで低下した事が重石となってドル売りが活発化すると切り返した。 |
| 22日 | ECBが20日-21日に行った第2回目のTLTRO(対象を絞った長期資金供給オペ)が公表され、供給額は452.7億ユーロと事前予想のおよそ倍であった事が明らかとなった。 |
| 26日 | 23日にフォーカス誌が複数の政府関係者の話として、経営不安が広がっているドイツ銀行(米国での住宅ローン担保証券(MBS)の不正販売問題について140億ドルの和解金を支払うよう、米司法省に求められている)への支援を、メルケル独首相が否定したと報じた。ただ、ユーロ/ドルは下落せずに上昇した。同報道を受けて週明けの欧州株が軟調に始まり、米長期金利が低下する中、ドル売りが強まったためである。独9月Ifo景況感指数が109.5と予想(106.3)を上回った事も追い風となった。 |
| 30日 | ユーロ圏9月消費者物価指数は事前予想通り、前年比+0.4%であった。その後「ドイツ銀行の米司法省との和解金が54億ドルに留まる可能性」との一部報道を受けてドイツ銀行株が急上昇すると、ユーロ/ドルは1.12502ドルまで上昇した。 |

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/USD

NYダウ平均

| | |
|-------|----------|
| OPEN | 18396.57 |
| HIGH | 18551.54 |
| LOW | 17992.21 |
| CLOSE | 18308.15 |

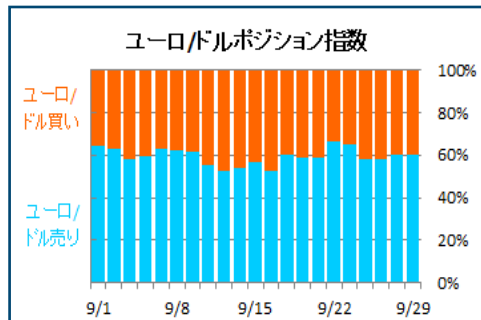
独10年債利回

| | |
|-------|---------|
| OPEN | -0.053% |
| HIGH | 0.079% |
| LOW | -0.161% |
| CLOSE | -0.119% |

米10年債利回

| | |
|-------|---------|
| OPEN | 1.5783% |
| HIGH | 1.7498% |
| LOW | 1.5170% |
| CLOSE | 1.5944% |

9月のポジション動向



10月のユーロ圏の注目材料

- ・8月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・10月独消費者物価指数・速報値 (28日)
- ・10月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数 (11日)
- ・10月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(31日)
- ・ECB理事会(20日)
- ・10月独/ユーロ圏PMI製造業・速報 (24日)
- ・7-9月期ユーロ圏GDP・速報値(31日)
- ・10月独Ifo景況感指数(25日)

10月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

10月はユーロ圏と米国のいずれも金融政策発表が予定されておらず、欧米の金融政策の方向性の違いが明確になる展開は期待しづらい。したがって、今月も方向感に乏しい値動きとなる公算が大きいと見る。

テクニカル面では、8月後半以降は概ね1.10ドル半ば～1.13ドル台半ばでレンジを形成。5日や20日といった短めの移動平均線のみならず、75日線や200日線もレンジ内に収束してきており、方向感が失われている事を示している。先月は欧米で金融政策が発表されたにも関わらずレンジを突破できなかった点を考慮すると、それなりの材料が出ないとブレイクするのは容易ではないだろう。

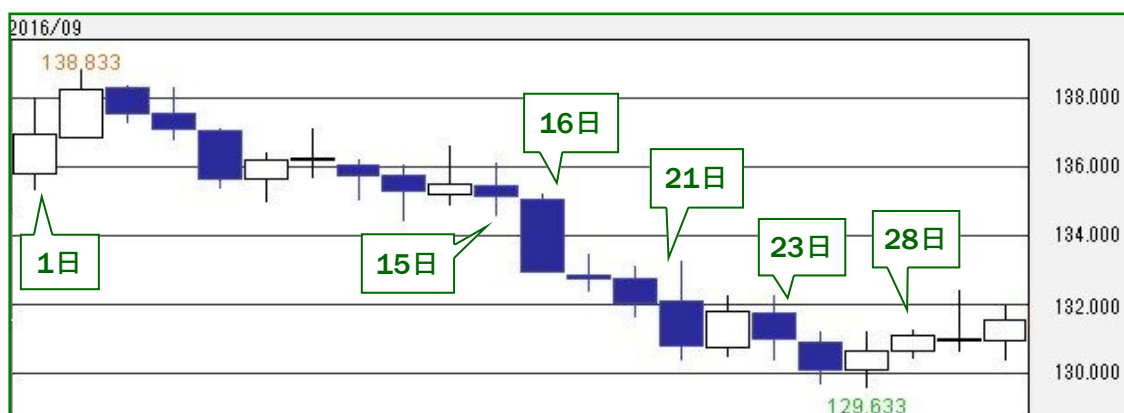
ただ、ドイツ銀行の和解金の行方について、当事者間で合意に至るまでは引き続きリスク要因となり得る。この問題が長引くようならば、不透明感が嫌気されてユーロ/ドル相場の重石となるだろう。仮に和解金が当初報道に近い額となった場合は、ドイツ銀行の経営不安が再燃しかねないので注意したい。(川畑)

(予想レンジ: 1.10500～1.13600ドル)

ポンド/円 9月の推移

GBP/JPY

9月のポンド/円相場は129.633～138.833円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約3.1%の下落(ポンド安・円高)となった。前月後半の勢いを引き継ぎ、2日には7月29日以来の高値となる138.833円まで上昇したがその後は失速。一時は、来年後半にずれ込むとの見方が強かった英国の欧州連合(EU)離脱に関する協議が、来年早々にも始まる可能性があるとの見方から、ポンドの先安観測が再燃した。また、日銀が「総括的な検証」を行い新たに導入した「長短金利操作付き量的質的金融緩和」は実質的な緩和縮小との見方が広がった事も重石となり、下旬には約1カ月半ぶりに130円を割り込む場面もあった。



四本値

| | |
|-------|---------|
| OPEN | 135.851 |
| HIGH | 138.833 |
| LOW | 129.633 |
| CLOSE | 131.563 |

| | |
|-----|--|
| 1日 | 英8月製造業PMIが53.3と、節目の50.0を上回る予想(49.0)以上の結果となり、ポンド買いが活発化。ただ、米8月ISM製造業景況指数が大きく落ち込んだことからドル/円が下落すると円全体に買い圧力が掛かり、ポンド/円は伸び悩んだ。 |
| 15日 | BOEは金融政策委員会(MPC)を開き、政策金利(0.25%)と資産購入枠(4350億ポンド)をそれぞれ据え置いた。同時に公表した議事録では「政策金利・資産購入枠は全員一致で据え置き」で決定した事が明らかとなった他、「最近のデータは個人消費よりも設備投資のほうが急激に鈍化する」という見通しに沿っている」「追加緩和が前向きな影響を及ぼしている」「年内のインフレ見通しは想定よりやや低くとどまると想定」「来年前半に物価は2%に到達する見通し」「8月の追加緩和は予想以上に資産価格を押し上げた」「住宅市場の短期的な見通しは想定より悪くない、消費はやや強め」「MPCの景気見通しの概観は8月と変わっていない」「第3四半期のGDP見通しを前期比+0.3%に上方修正、従来は+0.1%」「英経済の短期的なモメンタムは8月の想定と比較してやや上向き」などとする見解が示された。 |
| 16日 | ハモンド英財務相が「有権者が求めた移民制限を達成するために、EUの単一市場へのアクセスを諦めなくてはならない可能性があることを受け入れる用意がある。これは英国の銀行にとっては必要不可欠である欧州大陸の顧客へのアクセスも失うことになる」などと発言した事を受けてポンド売りが活発化した。 |
| 21日 | 日銀がこれまで3年半の金融緩和に関する「総括的な検証」を行った上で、「金融緩和強化のための新しい枠組み」として「長短金利操作付き量的・質的金融緩和」を発表。政策金利は-0.10%に維持、10年債を0%前後に誘導、80兆円としていた従来の長期国債買入れ目標はメドに格下げ、などとした。マイナス金利の深堀りを見送った事を好感して日本株が上昇する中、133.20円台まで上昇した。しかしその後は、黒田日銀総裁が国債買入れ額が減少する事もあり得ると発言した事などから「実質的な量的緩和縮小ではないか」との見方が徐々に広がり、円を買い戻す動きが強まった。 |
| 23日 | ボリス・ジョンソン英外相が、EU離脱の手続きを定めたリスボン条約50条を2017年初旬にも発動する意向を見せ、「交渉に必ずしも2年必要とは思わない」と発言すると、英国の早期EU離脱懸念が広がりポンド売りが優勢となった。 |
| 28日 | シャフィクBOE副総裁が「経済活動の減速が致命的なものになるのを防ぐため、金融による一段の刺激策がある時点で必要になると思われる」「その時期は今後数週間、数カ月のデータ次第だ」などと発言した事を受けて130.50円台まで一時弱含んだ。しかし、石油輸出国機構(OPEC)の非公式会合が行われ、予想外に原油の減産(小規模ながら)で合意。これを受けて株高・円安が進むと131.20円台まで反発した。 |

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

GBP/JPY

日経平均

| | |
|-------|----------|
| OPEN | 16885.16 |
| HIGH | 17156.36 |
| LOW | 16285.41 |
| CLOSE | 16449.84 |

FTSE100

| | |
|-------|---------|
| OPEN | 6781.51 |
| HIGH | 6941.09 |
| LOW | 6654.48 |
| CLOSE | 6899.33 |

英2年債利回

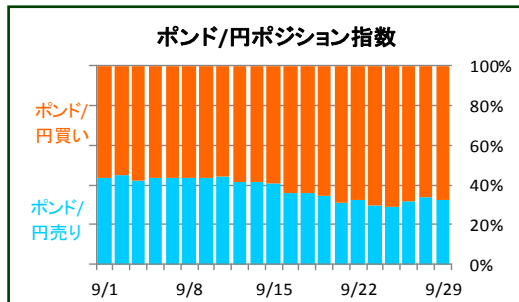
| | |
|-------|--------|
| OPEN | 0.148% |
| HIGH | 0.221% |
| LOW | 0.036% |
| CLOSE | 0.102% |

英10年債利

| | |
|-------|--------|
| OPEN | 0.642% |
| HIGH | 0.955% |
| LOW | 0.637% |
| CLOSE | 0.746% |

9月のポジション動向

10月の英国の注目材料



- ・9月英製造業PMI(3日)
- ・9月英建設業PMI(4日)
- ・9月英サービス業PMI(5日)
- ・8月英鉱工業生産(7日)
- ・8月英貿易収支(7日)
- ・9月英RICS住宅価格(13日)
- ・9月英消費者物価指数(18日)
- ・9月英生産者物価指数(18日)
- ・9月英雇用統計(19日)
- ・9月英小売売上高(20日)
- ・7-9月期英GDP・速報値(27日)

10月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

10月のポンド/円相場は、決め手を欠く中で方向感が定まりにくそうだが、後半は英中銀(BOE)と日銀の追加緩和への思惑に左右されそう。英国のメイ首相は10月2日の演説で、欧州連合(EU)との離脱交渉を来年3月末までに開始する意向を示したが、交渉はそこから原則2年をかけて行われる息の長い話であり、移民制限とEU単一市場へのアクセスを巡る交渉の行方などは、現段階では全く読みきれない。このため、交渉開始自体はポンドの売買材料として長続きしない公算が大きい。

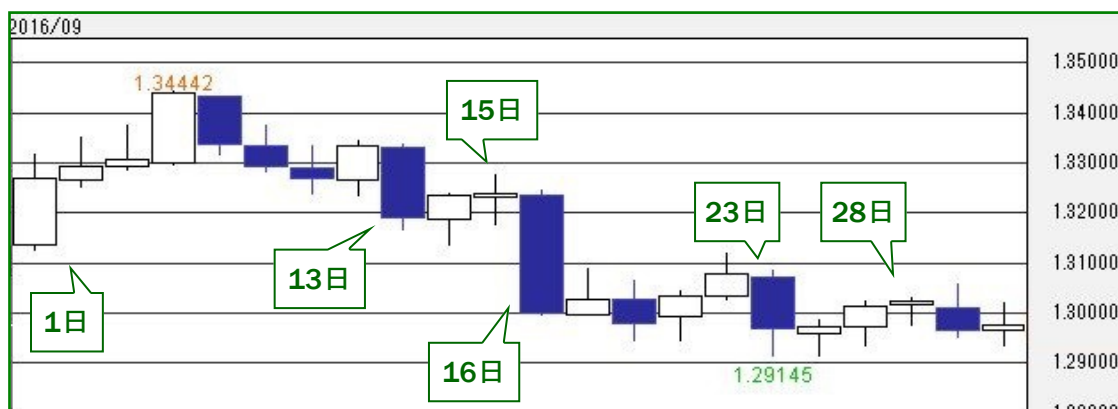
次いで注目される英中銀(BOE)の金融政策は、追加緩和の有無を巡って見方が別れている。次回11月3日の英金融政策委員会(MPC)に向けて英主要経済指標のほか、BOEの要人らの発言内容から追加緩和の手掛かりを探る事になる。ただ、11月1日には日銀も金融政策発表を行う予定であり、一部に追加緩和観測がくすぶっている。日・英中銀の金融政策の方向性が一時的にせよ逆行すれば、ポンド/円相場に思わぬ変動が生じる可能性もあるため要注意だ。(神田)

(予想レンジ: 126.000~136.000円)

GBP/USD

ポンド/ドル 9月の推移

9月のポンド/ドル相場は、1.29145～1.34442ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.2%の下落(ポンド安・ドル高)となった。前月後半の勢いを引き継ぎ、6日には米8月ISM非製造業景況指数の悪化を受けて7月15日以来の高値となる1.34442ドルまで上昇したがその後は失速。一時は、来年後半にずれ込むと見られていた英国の欧州連合(EU)離脱に関する協議が、来年早々にも始まる可能性があるとの見方が広がった。21日の米連邦公開市場委員会(FOMC)で利上げが見送られた事などからドルが上昇(ポンドが下落)する場面もあったが、ポンドの先安感を押え込む事はできなかった。



四本値

| | |
|-------|---------|
| OPEN | 1.31381 |
| HIGH | 1.34442 |
| LOW | 1.29145 |
| CLOSE | 1.29769 |

| | |
|-----|---|
| 1日 | 英8月製造業PMIが53.3と、節目の50.0を上回る予想(49.0)以上の結果となった一方、米8月ISM製造業景況指数は49.4と予想(52.0)外の50.0割れとなった。これらを受けてポンド買い・ドル売りが活発化すると、1.33ドル台を回復した。 |
| 13日 | 英8月消費者物価指数は前月比+0.3%(予想+0.4%)、前年比+0.6%(同+0.7%)、コア前年比+1.3%(同+1.4%)と揃って予想に届かなかった。また、英8月生産者物価指数も前月比+0.1%(予想+0.3%)、前年比+0.8%(同+1.0%)となり、想定以上のインフレ鈍化が確認された。また、米長期金利の上昇を背景にドルが買われた事も重石となり、ポンド/ドルの下落が加速すると1.31ドル台に差し込んだ。 |
| 15日 | BOEは金融政策委員会(MPC)を開き、政策金利(0.25%)と資産購入枠(4350億ポンド)をそれぞれ据え置いた。同時に公表した議事録では「政策金利・資産購入枠は全員一致で据え置き」で決定した事が明らかとなった他、「最近のデータは個人消費よりも設備投資のほうが急激に鈍化するという見通しに沿っている」「追加緩和が前向きな影響を及ぼしている」「年内のインフレ見通しは想定よりやや低くとどまると想定」「来年前半に物価は2%に到達する見通し」「8月の追加緩和は予想以上に資産価格を押し上げた」「住宅市場の短期的な見通しは想定より悪くない、消費はやや強め」「MPCの景気見通しの概観は8月と変わっていない」「第3四半期のGDP見通しを前期比+0.3%に上方修正、従来は+0.1%」「英経済の短期的なモメンタムは8月の想定と比較してやや上向き」などとする見解が示された。 |
| 16日 | ハモンド英財務相が「有権者が求めた移民制限を達成するために、EUの単一市場へのアクセスを諦めなくてはならない可能性があることを受け入れる用意がある。これは英国の銀行にとっては必要不可欠である欧州大陸の顧客へのアクセスも失うことになる」などと発言した事を受けてポンド売りが活発化した。 |
| 23日 | ボリス・ジョンソン英外相が、リスボン条約50条(EU離脱に関する手続きを定めた条項)を2017年初旬にも発動する意向を見せ、「交渉に必ずしも2年必要とは思わない」と発言。早期の英EU離脱懸念からポンド売りが強まった。さらに、ローゼンブレン米ボストン連銀総裁が「緩やかで段階的な引き締めを今は支持」「利上げ見送りは著しい不均衡生じさせるリスク」などと発言した事をきっかけにドル買いが強まると1.29145ドルの安値を付けた。 |
| 28日 | シャフィクBOE副総裁が「経済活動の減速が致命的なものになるのを防ぐため、金融による一段の刺激策がある時点で必要になると思われる」「その時期は今後数週間、数カ月のデータ次第だ」などと発言した事を受けて1.2910ドル台まで一時弱含んだ。しかし、石油輸出国機構(OPEC)の非公式会合が行われ、予想外に原油の減産(小規模ながら)で合意。これを受けて株高・ドル安が進むと1.30ドル台へと反発した。 |

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

GBP/USD

NYダウ平均

| | |
|-------|----------|
| OPEN | 18396.57 |
| HIGH | 18551.54 |
| LOW | 17992.21 |
| CLOSE | 18308.15 |

米10年債利回

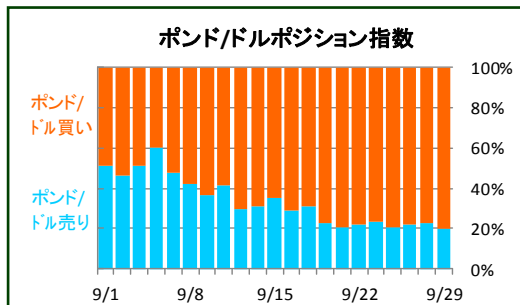
| | |
|-------|---------|
| OPEN | 1.5783% |
| HIGH | 1.7498% |
| LOW | 1.5170% |
| CLOSE | 1.5944% |

英10年債利回

| | |
|-------|--------|
| OPEN | 0.642% |
| HIGH | 0.955% |
| LOW | 0.637% |
| CLOSE | 0.746% |

9月のポジション動向

10月の英国の注目材料



- ・9月英製造業PMI(3日)
- ・9月英建設業PMI(4日)
- ・9月英サービス業PMI(5日)
- ・8月英鉱工業生産(7日)
- ・8月英貿易収支(7日)
- ・9月英RICS住宅価格(13日)
- ・9月英消費者物価指数(18日)
- ・9月英生産者物価指数(18日)
- ・9月英雇用統計(19日)
- ・9月英小売売上高(20日)
- ・7-9月期英GDP・速報値(27日)

10月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

第4四半期入りのため注目される10月相場となるが、ポンド/ドル相場の決め手になりそうなイベントは少ない。英中銀(BOE)の金融政策委員会(MPC)と米連邦準備制度理事会(FRB)の連邦公開市場委員会(FOMC)が行われる11月上旬を睨んで方向感を模索する事になりそうだ。英MPCは欧州連合(EU)離脱によるショックを和らげるために追加緩和を行う構えを示している一方、米FOMCは金融政策の正常化に向けて段階的に利上げを行う方針と、両中銀の方向性は逆行している。この点から、前提条件としてポンド/ドル相場はポンド安・ドル高方向に流れが向かいやすいと考えるべきだろう。ただ、そうした金融政策の方向性に関する印象の格差はすでに大部分が織り込み済みと言える。英MPCの追加緩和観測が後退すればポンド高に振れやすく、米利上げ観測が後退すればドル安が進みやすい地合いでもある。

10月のポンド/ドル相場は、両国の主要経済指標や金融政策当局者らの発言を受けて神経質な値動きを示現する事になりそうだ。また、11月8日の米大統領選挙を前に行われる候補者討論会(9日、19日)と、それに続く世論調査の結果にも注目しておきたい。(神田)

(予想レンジ:1.26000ドル~1.33500ドル)